言葉の指導法 12 年の変化

幼児教育講座・深田昭三

１．分析対象とした授業

本報告では対象科目として「言葉の指導法」とを取り上げた。「言葉の指導法」は，2 回生対象の科目であり，幼稚園教育要領における領域「言葉」の指導法を取り扱う。本授業は，幼稚園 1 種免許状の必修科目・2 種免許状の選択科目であり，幼年教育専修及び保育士コースの必修科目でもある。2017 年度の受講生は 40 人であった。

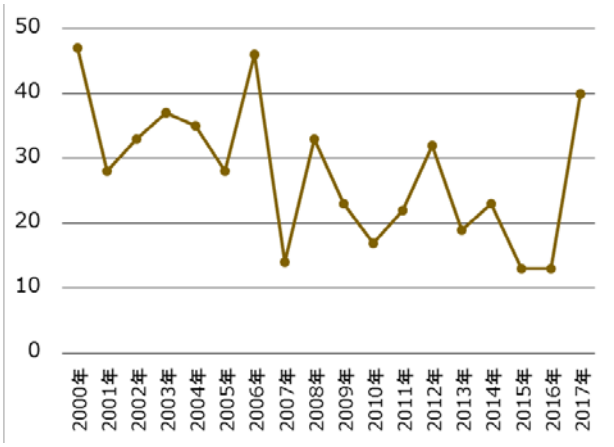

図 1. 2000 年～2017 年の受講者数の推移

「言葉の指導法」の受講者数は，図 1 に示したとおり 2000 年から 2006 年くらいまでは 40 人弱で推移していたが，その後漸減し近年は 20 人を切るまでに減少していた。ところが，教育学部改組に伴い小学校サブコースが設置されたことで，今年度は小学校サブコースの学生が多数受講していた。

表 1. 受講生の内訳

課程	コース	サブコース	2回生	3回生以上	合計
学校教育教員養成課程	初等教育コース	幼年教育	6	0	6
		小学校	22	0	22
	中等教育コース		0	0	0
	各教科		0	1	1
特別支援教育教員養成課程			7	3	10
大学院				1	1
合計			35	5	40

２．moodle の活用状況

「言葉の指導法」では，2015 度より moodle を活用して，時間外学習課題を出すこととしている。具体的には，毎時間の授業の後に，授業で学習した内容と関連のある事項を調べるなどして，その成果を moodle に書き込む形でレポートするよう求めた。次の授業時間では学生が入力したショートレポートの中から数件選んで紹介し，コメントをした。

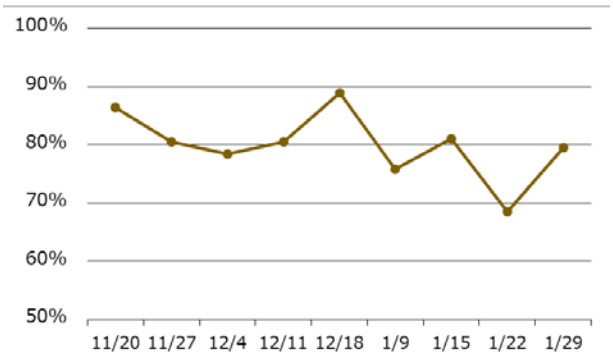

図 2. moodle 課題の提出状況（回別）

moodle での課題提出を成績に反映させた 11 月 20 日から 1 月 29 日までの課題提出状況を図 2 に示した（途中で受講を取りやめた 1 名を除く）。やや右下がりの傾向はあったもののおおむね 80%前後の提出率であった。この期間の課題提出率の平均は 80.0%であった。

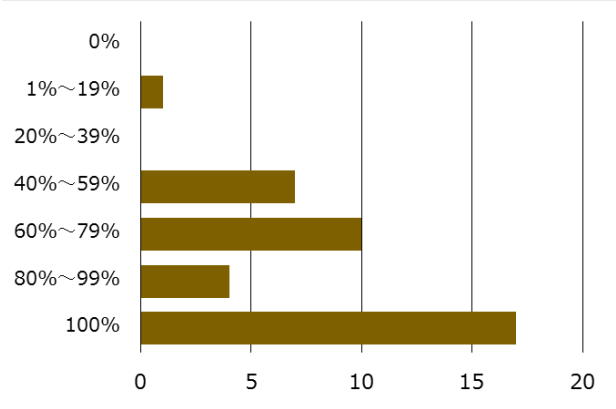

図 3. moodle 課題の提出状況（人）

図 3 は moodle 課題の提出状況を個々の学生の提出率ごとにまとめたものである。提出率 100%の学生が最も多かったが，提出率 60%前後の学生も少なからずおり，提出率が二極化していたことがうかがえる。

コース別に提出率を見てみると，幼年教育サブコースの学生（6 人）が 83%，小学校サブコースの学生（21 人）が 75%，特別支援教育の学生（10 人）が 86%であった。小学校サブコースの学生の課題提出率が若干低い傾向にあった。

３．授業評価の結果

授業評価アンケートは，(1)授業外学習の時間を問う質問，(2)授業に対して各側面からの評価を行う質問と，(3)授業の工夫点が良かったかどうかを問う質問について，すべて 1 から 5 までの 5 段階評定を求めた。

本報告では，moodle 課題を導入する以前の 2005 年，moodle 課題を導入した 2015 年，そして本年の 3 カ年を比較して授業評価の結果を考えたい。

表 2. 授業外学習時間の推移

学習時間	2017年度		2015年度		2005年度	
30分未満	9	23%	1	11%	19	79%
30分程度	12	31%	6	67%	5	21%
1時間未満	13	33%	1	11%	0	0%
1時間以上	4	10%	1	11%	0	0%
2時間以上	1	3%	0	0%	0	0%
合計	39	100%	9	100%	24	100%

まず，(1)の授業外学習の時間について，アンケートから得られた結果を表 2 に示した。2005 年では 8 割近い学生が授業外学習をほとんどしていなかったのに対し，2015 年では 30 分程度の学習時間が最頻値になっていた。本年においては，2005 年度と比べても「30 分から 1 時間」の学習をしている学生の比率が大きくなっていた。一方で 30 分未満という答えも少なからずあったことも注目される。moodle 課題への回答率で見られたように，しっかりと授業外学習して課題に取り組んでいる層と，あまり熱心に取り組んでいない層に分離していたとも考えられる。

(2)授業に対して各側面からの評価を行う質問と，(3)授業の工夫点が良かったかどうかを問う質問については，その結果を図 4 と図 5 に示した。これらについては，年度間の大きな違いはなかった。ただし，感想文（または moodle 課題）に対して「よかった」とする評定が下がっているのは気になるところである。

４．地域社会を核とした教育と研究のつながりについて

本授業では，内容を説明するとき，附属幼稚園との共同研究で得られた成果，附属幼稚園で行われた卒業研究で得られた研究結果や事例，附属幼稚園やその他の地域の幼稚園等で行われた保育実践などを，機会があるごとに紹介した。また，Show & Tell（思い出の品をもとにショートスピーチする試み）の中で，生まれ育った地域での経験を紹介する学生も少なからずいた。

しかし，授業内容が言語発達とその支援である本授業においては，言語発達における地域性よりも，乳幼児間の共通性を理解させることに主眼が置かれること，写真・ビデオ利用については，幼児の個人情報への配慮から利用しづらいことから，「地域社会を核とした教育と研究のつながり」には十分取り組みにくかったことも否めなかった。

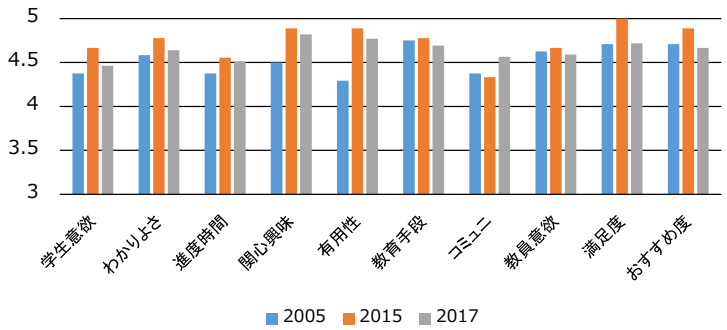

図 4. 授業に対する各側面からの評価

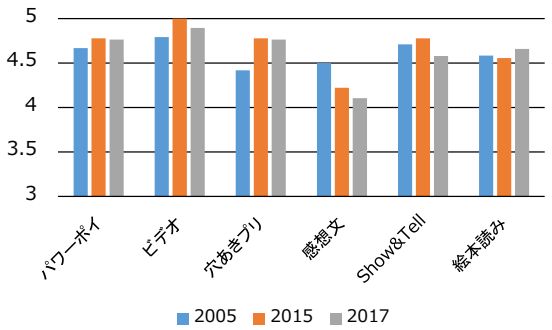

図 5. 授業の工夫点に対する評価